

浄瑠璃・世話物

「冥途の飛脚」

◎初演 正徳元(一七一二)年七月以前 竹本座

「ああ、生きられるだけこの世で添おう…」

あらすじ

上之巻

(飛脚屋亀屋)

大坂淡路町の

飛脚屋亀屋の養子忠兵衛は、丹波屋

八右衛門

からの預かり金五十両を、以前から入れ込んでいた新町の遊女梅川の身請

け金の一部に流用する。同情した八右衛門は、いったんは返済を待つ。その後、忠

兵衛は、侍の屋敷に届ける公金三百両を懐に出かけるが、その身はいつのまにか新

町方面へと向かう。

中之巻

(新町越後屋)

新町の廓の茶屋越後屋の

二階。八右衛門が現れ、忠兵衛を、梅川に寄せつ

けないよう遊女たちに頼む。そこに現れた忠兵衛

は、八右衛門と口論になり、「男の一分(面目)

捨てさせた」と懐の中の三百両の封印を切り、八



右衛門に五十両を投げつける。公金に手をつけることは大罪。残りの金で梅川の身請けをした忠兵衛は、梅川を連れて逃げるように廓を立ち去る。

**下之巻**（大和への道行く新口村）二人は、忠兵衛の実父孫右衛門の住む大和国新口村にたどりつくが、ここにも詮索の手はのびている様子。隠れ見している二人の目に、時雨のなか、道を急ぎ、泥田に転ぶ孫右衛門の姿が見えた。梅川は思わず飛び出し、孫右衛門を介抱する。すべてを悟った孫右衛門は、梅川にお金を渡し、逃げるように促す。二人は父親との名乗りも果たさず、急いで姿を消すが…。

**見どころ** 非常に上演回数が多い作品ですが、初演後は長く「傾城恋飛脚」「恋飛脚大和往来」など改作物で上演されてきました。これらの改作では、八右衛門が忠兵衛の「封印切」をさかんに挑発するなど、典型的な敵役として描かれます。また下之巻「新口村の段」でも、雪が舞い散る中、親子が目隠しをしたまま対面する場面を作るなど、原作にはない通俗的な趣向が目立ちます。一方、この作品では、何といっても、ヒロイン梅川が忠兵衛に注ぐ心情の美しさに胸を打たれずにはいられません。彼女が忠兵衛と連れ立って破滅への道をたどるとき、そこに私たちは、時代を超えた究極の愛のかたちを見ることでしよう。